

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	高 津 希 和 子
論 文 題 目	中世における語の位相と文学の研究
<p>審査要旨</p> <p>本論文は、中世初期から後期にかけて、特徴的なキーワードを起点として説話化される人物とその説話構想、および個々の作品中の言葉と構想との連関について、三部に分けて論じるものである。本論文を通じ、中世文学における作者の自己認識と権威構築、作品生成の過程を明らかにしており、現代における説話文学研究の新しい研究方法を切り拓いた点は、高く評価出来る。以下その内容に基づきつつ、審査報告を行う。</p> <p>第一部『『語』の生成—小野宮実資を中心に—』は、「賢人実資と日記の享受」「藤原実資の周忌願文と『賢人』『賢人』説話の生成と展開」「『古事談』の手法」の全4章から成る。「賢人」と呼ばれた小野宮実資の説話化の過程を、『花園天皇宸記』『小右記』などの日記や『古事談』などの説話集から知られる実資像検討を通じて解明する。すなわち、実資賢人説の原拠となったはずの『小右記』における「賢」を含む語を考察して、実資自身の「賢」なることに対するこだわりを確認して、後世の実資評価の端緒を見出そうとする。次に『奉為亡考小野宮右大臣四十九日追善』の文章表現を逐一検討しつつ、後世の実資評価の源流の一つに実資没後の親族による伝承があり、それは実資が長らく大臣職にあつて諫臣として活躍したこと、また長寿と見識とを兼ね備えていたことに基づくイメージであったことを解明する。次に実資が登場する説話作品を分析、『今昔物語集』『発心集』『十訓抄』『続古事談』『富家語』などの説話集において、賢人にして神に通じる偉人とされる実資の説話的人物像の原拠にも、実資を知る人々の実資評が介在していた可能性を論じ、そこからさらに菅公説話との混淆などを通じて、実資の霊性を認めようとする説話が展開していったとする。一方『古事談』においては、実資の好色の逸話が秘事として紹介されることを取り上げ、実資説話の裾野の広さを指摘する。全体に回り道が多く、冗長な印象は否めないものの、文献を丁寧に読み解いて説話化された人物の実像を解明し、そこから説話が生成されていく過程を分析する姿勢は評価出来る。</p> <p>第二部は『『語』の展開—大江匡房の著述—』は、『『狐媚記』試論』『続本朝往生伝』序文考』『入宋僧奄然をめぐる言説』の全三章から成る。「知識人」とされる大江匡房の、白楽天や慶滋保胤など前代文人作品の受容のあり方を論じ、匡房の文学的営為の特質を解明する。市井で噂される怪異を列記した『狐媚記』については、「狐媚」の語例を広く漢籍に求めて、匡房の用例との違いを指摘し、既成の「狐媚」の概念にとらわれない、匡房の新たな文体の創出と評価する。次に匡房の著作『続本朝往生伝』の慶滋保胤への傾斜をその序文の用語例の分析を通じて行い、また同書所載の大江為基伝を検討して、保胤の著述との照応を論じる。さらに『続本朝往生伝』の大江定基伝において、定基と対比される僧奄然の悪評につき、慶滋保胤との親交や奄然の能力に関する歴史的事実を歪曲した結果であることを示して、匡房の慶滋保胤への意識の複雑さを描き出す。第二部でも漢籍の援用を通じて緻密な読みを心がけることは評価出来るが、しばしば本論から外れた考証を重ねることにより、論点が不明確になっていることが惜しまれる。</p> <p>第三部『『語』の系統—書承と口承—』は、『鐘』をめぐる言説の展開』『笹岡』をめぐる伝承の展開』『花鏡』本文系統試論』の全三章から成る。漢文説話集の『古事談』、中世中期の神話を集成した『神道集』、世阿弥の能楽論書『花鏡』を取り上げ、『古事談』の「鐘」、『神道集』の「笹岡」、『花鏡』の「イタン」というキーワードが、説話展開や作品の伝来とどのように関わるのかを分析する。それぞれが独立性の強い論考の集積であるが、「伝承」「伝来」という問題に焦点を合わせようとする著者の</p>	

氏名 高津希和子

方法と志向をよく示すものではある。第一章は、『古事談』等に見える、六道珍皇寺の鐘にまつわる説話が、霜が降りると鐘がひとりでに鳴るという中国故事に基づく可能性を論じる。漢籍の鐘説話と『古事談』のそれとの関連はやや弱い、鐘にまつわる多くの故事説話を引用する点が貴重である。第二章は、『神道集』に見える「笹岡」の地名を取り上げる。「群馬八ヶ権現事」「諏訪縁起事」「上野国一宮事」に天狗や神々の往来の地として複数の土地の共通地名とされる。この「笹」「岡」の語がいずれも死のイメージと密接に関わり合うとの想定に基づき、この語以外にも民間神話に特異な地名が共有されている事実を指摘する。にわかには結論は求めがたいものの、注目に値する問題提起といえよう。第三章は世阿弥の能楽論『花鏡』の諸本伝来論である。「イタン」という題記を持つ『花鏡』の異本群(いわゆる吉田本系諸本)が、いずれも首尾を欠く残欠本であることに注目し、完本である金春本系の本文との異同から、「イタン」という題記ならびに欠落が生じた過程について想定する。考察がもっぱら首部の欠損に集中し、跋文も欠落している事実と言及がほとんどないなどの問題は含むものの、吉田本系『花鏡』の伝来についての有力な異説の一つと評価出来る。

以上、本論文は、中世初期の漢文説話を中心に、説話形成の過程を漢籍語彙の使用例から演繹しようという独自の方法に基づき、そこにはたらく説話集編者の意図までを考察したものであり、説話研究の新しい方法を示唆するものとして評価出来る。語彙検討の範囲の広がり、かえって論点を見えにくくしているという欠点を生じているが、文献の緻密な解釈を通じて漢文説話の文学性を解明しようとする研究姿勢は、高く評価出来る。よって本委員会は、高津希和子氏の学位申請論文『中世における語の位相と文学の研究』を、早稲田大学博士(文学)学位にふさわしいものと判定する。

公開審査会開催日	2016年 6月 11日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位名称
主任審査委員	早稲田大学・教授	竹 本 幹 夫	中世日本文学	博士(文学)
審査委員	早稲田大学・教授	大 津 雄 一	中世日本文学	博士(文学)
審査委員	早稲田大学・教授	兼 築 信 行	中世日本文学	
審査委員				
審査委員				